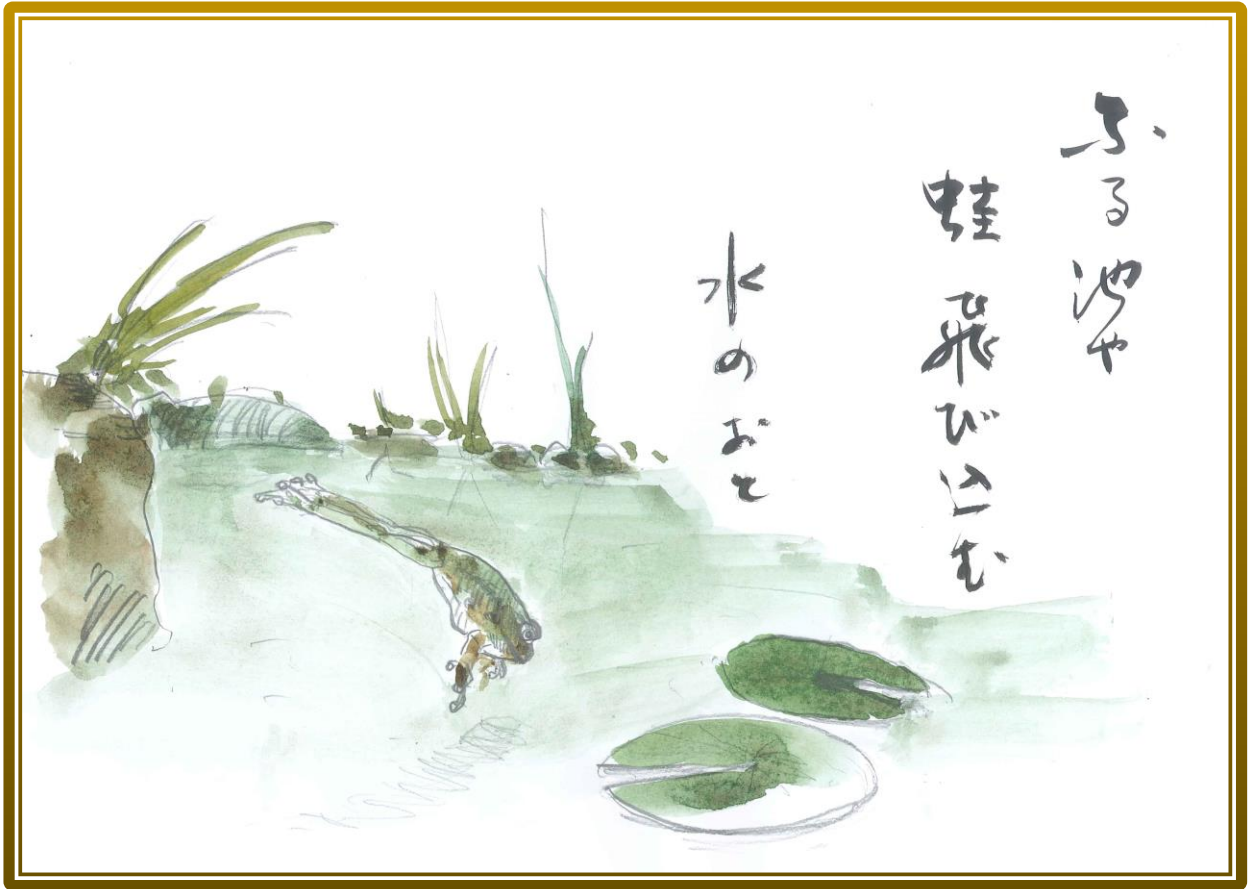


—令和元年霜月（11月）のことば—



『古池や ^{かわず}蛙飛び込む 水のおと』

空気も水も清く澄んだ季節になってきました。まして奥山方広寺の山中の朝夕は静まりかえって、身も心も洗われます。

上の俳句は俳聖と呼ばれる松尾芭蕉の有名な一句ですが、同様に「閑さや ^{しずか}岩にしみ入る ^{せみ}蟬の声」の句もあります。恐らくどちらの句も、春夏と季節こそ違えど ^{ひとけ}人気のない静寂な環境で ^よ詠まれたものと思われます。この静寂を静寂以上に詠み上げるセンスや読み親しめるセンスは東洋人独特のものなのかも知れません。「一鳥 ^{いっちょう}啼かず山さらに ^{ゆう}幽なり」（一羽の鳥さえも鳴かないので、山中はいよいよ ^{ゆうげん}幽玄である）か、「一鳥 啼いて 山さらに幽なり」（山鳥が一声鳴いて、山中はいよいよ幽玄である）かでは感覚的な静けさが異なり、後者はより一層極まってくるように感じませんか。芭蕉の両句も蛙や蟬が ^{かも}醸し出す一声によって静けさが極まります。この感覚はひよつとすると「一病を得て ^{すこ}健やかなるを ^し識る」というように、病気になって初めて日頃の健康であることの有難さを認識するとか、自身が傷ついて初めて人に優しくなれることに通じているのかも知れません。

そう云えば、正光寺の本堂前の庭でカッコーンと時折り ^{ししおど}鹿威しが鳴ると、「ああ、こんなに静かだったんだ」と気づかされることは確かにあります。